（仮称）マザーレイクフレームワークの骨子イメージ（案）

１．目的

行政を含む多様な主体が、共通の目標（マザーレイクゴールズ）に向かって様々な形で「主体的」に琵琶湖に関わるための枠組み「（仮称）マザーレイクフレームワーク」を構築し、適切な環境への関わりを創出し、取組を推進することを目的とする。また、マザーレイクフレームワークはSDGsの取組の具体的展開の一つでもあり、持続可能な社会の構築にも貢献するものである。

２．フレームワークの位置づけ

マザーレイクフレームワークは、多様な主体による琵琶湖の保全再生に向けた様々な取組を後押しするための枠組みであり、県は琵琶湖保全再生計画等に基づき実施する施策との両輪で琵琶湖の保全再生を推進していく。

３．取組の方向性

多様な主体が琵琶湖の現状や課題を共有し、共通の目標に向けて各自ができることで琵琶湖に関わることで、創発(※)的で多様な活動が展開されていくことを目指す。

※創発：個々の取組の単純な総和にとどまらない成果が全体として現れること

４．基本理念

（マザーレイク21計画から継承）

琵琶湖と人とが共生する健全な状態を、持続可能な形で次世代に継承していくことを、琵琶湖に関わる全ての人々との間で共有する。

基本理念：「琵琶湖と人との共生」
（琵琶湖を健全な姿で次世代に継承します）

この基本理念は、県の基本構想や第５次環境総合計画にも通じるものであり、琵琶湖保全再生計画に示された、活力ある暮らしと保全との「共存」、人々の幅広い「共感」、琵琶湖の価値の「共有」のもとで進める。

５．2050年頃のあるべき姿

（マザーレイク21計画から継承）

基本理念に基づく2050年頃の琵琶湖のあるべき姿を、「活力ある営みの中で、琵琶湖と人とが共生する姿」とし、多様な主体との間で共有しやすいものとするために具体化したイメージを描くこととする。

（例）

●琵琶湖の水は、あたかも手ですくって飲めるように清らかに、満々として

●春には、固有種のホンモロコやニゴロブナ等がヤナギの根っこ、ヨシ原、増水した内湖や水路等で産卵し、周囲の山並みは淡緑、淡黄等のやわらかな若葉と、常緑の樹々との鮮やかな彩りをみせ

●夏には、緑深い山から吹く風が爽やかに湖面をわたり、湖辺の公園では、水遊びする人びとの姿が見られ、足もとにはさらさらした砂地と固有種セタシジミの感触

●秋には、固有種のビワマスが体を赤く染めて河川や水路を山里深く遡上して、豊かな森の土に育まれた水量豊富な渓流で産卵し

●冬には、えり漁を背景にカモが群れ遊び、湖辺では荒田起こしの作業の側で、サギが餌をついばむ

●目を転じれば、街中には四季を通じて小川が清らかに流れ、夏にはホタルが舞い、遠くから祭の囃子が聞こえ

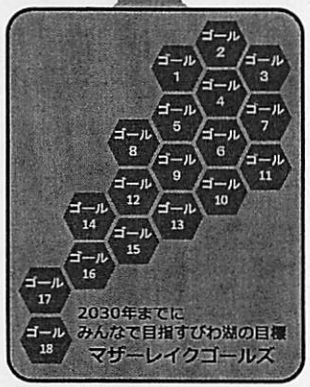
・・・・・

６．マザーレイクゴールズ

（びわコミ会議でのコミットメントなどをもとに設定）

2050年頃の琵琶湖のあるべき姿

2050年頃の琵琶湖のあるべき姿に向けた、2030年までに達成する目標（琵琶湖版SDGs）



◆「みんなが主役になる」
◆「食べる・楽しむ・汗をかく」
◆「人と人をつなげる」
◆「人と琵琶湖をつなげる」

（例）

◆「生物にとって棲みよい水に」
◆「増えすぎた水草を減らす」
◆「適正に保全・管理された森林を増やす」
◆「外来動植物を減らす」
◆「在来魚介類のにぎわう湖に」
◆「ヨシ群落を保全する」
◆「湖岸景観を守る・活かす」
◆「ごみのない美しい琵琶湖に」
◆「CO2ゼロで気候変動から琵琶湖を守る」
・・・

（個々の目標は、多様な主体のみなさんの意見をもとに今後決めていく）

７．参画の主体と方法

マザーレイクフレームワークへの参画は、企業やNPO、個人など、琵琶湖に想いを寄せる全ての主体を対象とする。

多様な主体は、マザーレイクゴールズの達成に向けて、各々の取組や活動を琵琶湖との約束（コミットメント）として宣言する。

宣言は、WEBサイトなどから登録し、多様な主体との間で共有する。

（コミットメントの例）
当社はMLGsに掲げられた「生物にとって棲みよい水に」の目標達成のため、最新の排水処理技術を採用します。

８．プラットフォーム

（マザーレイク21計画から継承）

多様な主体が集うプラットフォームは、マザーレイク21計画に位置付けられた「マザーレイクフォーラム」を拡大する形で継承する。

この新しいマザーレイクフォーラムでは、琵琶湖との約束を宣言した個人や企業、団体が、必要な情報の交換や連携、協力を行う場とする。

また、琵琶湖の現状や課題、多様な主体による取組の状況などを共有する「びわコミ会議」などを実施する。

９．多様な活動の創発

暮らしの中で琵琶湖との関わりが希薄となっていることから、行政が設定した課題に対して参加を呼び掛ける目的合理(※1)的な手法だけではなく、多様な主体が興味を持ち自発的に行う取組を後押しする形態合理(※2)的な手法で参画を促していくことも有効と考えられる。

例えばマザーレイクゴールズにつながる様々な「プロジェクト」により、創発的で多様な活動を促すことなどが考えられる。

（例）水草資源の地域循環プロジェクト

※1目的合理：目標を掲げてそのために行動すること
※2形態合理：活動への参加そのものに価値を見出し、行動すること

10．推進のための仕組み

「学術フォーラム」や「びわコミ会議」を開催し、多様な主体の参画のもとで様々な指標をもとに「琵琶湖の健康診断」を行い、達成状況をフォローアップする。

■学術フォーラム
学識経験者により構成し、学術的な観点から、琵琶湖と暮らしの現状を分析・評価する

■びわコミ会議
年に一度多様な主体が集い、琵琶湖の現状や課題、取組の状況などを共有し、次の取組につなげる場とする

こうした場において、琵琶湖の現状や多様な主体による取組の状況について議論し、必要に応じて、マザーレイクゴールズの見直しや追加などについても検討する。

11．インターネットを活用した情報の可視化

インターネットを活用した情報発信や、参画の可視化を進める。

参画を可視化（見える化）することにより、琵琶湖に関わる活動の広がり、個々の小さな取り組みがより大きな成果につながっていることを実感し、取組のモチベーションの向上につなげる。

12．マザーレイクフレームワークの策定

●策定の時期：令和3年（2021年）3月
●策定の場：趣旨に賛同する多様な主体のみなさんが参加する場で採択
「（仮称）マザーレイクフォーラム2021」